グリーン車でらくらく乗り鉄（自主）鉄道取材その 2
土佐中村：四万十市トンボ自然公園　編

その 1 に引き続き、筆者は伊予西条駅発 15 時 19 分 しおかぜ 13 号に乗り込む。もっとゆっくりと、しおかぜ 15 号（16 時 19 分発）でもよかったのだが、この後、高知まで行こうと欲を出した結果、せわしない「四国鉄道記念館」訪問となってしまった。少し反省である。また、今回の列車は 15 時 40 分には今治に着いてしまう。短いグリーン車の旅である。伊予西条の駅前のコンビニで購入したビールを空けたところでちょうど今治着。

今治はしまなみ海道の入り口にひかえ、やきとりや瀬戸内の海産物がおいしいところ。

ここでは「ザンキ」といえば鶏のから揚げなんだそうだが、この言葉、北海道（札幌）でも同じ意味だった。方言の伝播性？何か文化人類学的なにおいがする。

そんなことはさておき筆者は「二葉」さんでお目当ての鯛めし弁当と瀬戸の押し寿司を購入する。

購入を済ませたら、みどりの窓口で素早く次の列車の切符を購入。多度津を経て一挙に本日の目的地高知まで向かう。

16 時 06 発 しおかぜ 24 号のグリーン席に乗り込み、これまたビールをのみながら、弁当を食べ、遅い昼食とする。酒と駅弁がうまい。

列車の旅の一番いいところは、何といっても、お酒を飲んでも大丈夫なところ。しばし、世間の、日頃の、憂さを忘れることとする。あんまり気分が良すぎて肝心の駅弁の写真を取り忘れる。
（上の写真の二葉さんの看板で御容赦を・・・）

8 号車に筆者を乗せた振り子特急「しおかぜ」は快調にとばし、先程までいた伊予西条を通

（DF50 がもう懐かしい）

り抜ける。特急列車は定刻（17 時 24 分）に多度津に到着し、今度は土讃線の特急「南風」19 号に乗り換える。多度津発 17 時 55 分、大歩危・小歩危も夕暮れの闇の中、眠さも手伝って、気づいたら土佐山田駅を出るところだった。20 時前に高知着。もう少し「乗り鉄」しても良かったが、高知で飲んで食べての方を選択。駅前のホテルに入ったら、アーケード街へ赴き、土佐焼酎に鰹のたたき、地鶏のから揚げ、ウツボの天ぷらなどなど。高知の名産物を一人堪能したのでありました。

ご満悦に浸った翌朝は早く、6 時 06 分高知発、あしずり 51 号に乗り込むため早朝の高知駅に向かう。前日、切符を購入しておいたのが吉と出て、何とか余裕で列車の乗り込むことができた。

6 時 06 分朝の高知駅をあしずり 51 号宿毛行が出発した。
本日の目的地は、土佐くろしお鉄道、中村宿毛線中村駅である。到着まで約 2 時間。朝飯代わりのちくわとおつまみ、早朝からまたビールである（まだ飲むのか！）。
ゆっくりと列車の時間を味あう。車窓からの景色がとても美しい。川の透明度が違う。さすが高知県！シートももちろんグリーン車である。この列車、合計 4 本ある下りあしずり号の中で、唯一グリーン車を連結する列車である。宿毛に到着後折り返し、南風 12 号岡山行きになる。

（窪川駅にて予土線の列車と落ち合う。長い停車時間を利用して撮影）

地方駅の少し複雑な配線にはシビレル！

列車は窪川から土佐くろしお鉄道、中村宿毛線に入る。
2000 系気動車がもくもくとディーゼル排煙をあげながら走行するシーンはデーゼルカー天国 JR 四国の面目躍如といった感がある。「しおかぜ号」のような快適さとは違う魅力だと思う。気動車特急！この響きにまさる乗り鉄の魅力はないと筆者は思うのである。幼少～少年時、和歌山に在住していたころ、あのブルドックヘッドもキハ 81「くろしお」を何度も目に焼きつけながら、一度も乗車できなかった想いが筆者のこの価値観につながっているのだと思う。気動車ディーゼルサウンドが煩く思えないのもここに原因があるのだろう。

さて、8 時 26 分、
特急列車は（土佐）中村駅着。あしずり 51 号はそのまま宿毛に向けて中村を経ってゆく。

早朝、高知を経ち 9 時前にここに来たわけはただ一つ。
中村にあるトンボ自然公園、「四万十川学遊館　あきついお」（通称トンボ王国）に向かうためである。ここが第 2 の取材対象である。

中村駅は四万十川の河口に位置し、四万十川観光のアクセスの中心地となっており、各方面へのバスやツアーの拠点となっている。中村駅から「あきついお」へは地図上でも四万十川を渡り、約 4 キロはありそうな道のりである。そのため、バスを利用してアクセスすることも可能だが、この 8 時 26 分着を最大限に活かしたい。駅周辺のレンタサイクルもオープンはまだ先のようである。

そこで、駅正面を背にして国道 439 号線を国道 56 号線方面に向かうこと徒歩約 10 分、中村大橋たもと、8 時 30 分から開館する「四万十市観光協会観光案内所」を目指すこととする。ここでは早朝からレンタサイクルが借れるのである。ゆっくり四万十川や中村市内を堪能しながらポタリングすれば、「あきついお」開館時間 9 時に余裕である。

「観光案内所」ではレンタサイクルの他、四万十川＆中村（幡多地区）観光とエコツーリズムの相談や参加、観光遊覧船のチケット販売などにも利用できてとても便利な存在である。それと観光案内所が立地する一角には“道の駅”よろしく「サンリバー四万十物産館」がある。両館とも写真がなくて残念だが、ひっきりなしに利用者が訪れる。「サンリバー四万十物産館」では、ここの周辺や高知県・四国全般の名産物の他、お土産品から地元の方々による手作り惣菜＆お弁当まで、何でもそろう物産館である。何とクレジットカードも使える＆宅急便で送付もできる便利さで、筆者は思わず鰹のたたきセットをカードで購入し、宅急便で送り、弟夫婦の義両親への夏のあいさつにした。

物産館の他にも、敷地内には食堂施設とコンビニも併設されて、とても便利な場所であ

る。こうしている間でも大きなバスが何台も横付けされ、シニアお遍路さんの団体客がぞろぞろと入館！！「あきついお」9時着予定だったのが長居しすぎたようだ。そそくさとビールと作りたてのまだ温かいおにぎりセットを購入して「物産館」をあとにする。そうそう、レンタサイクルはママチャリ型とマウンテンサイクル型が選べるが、筆者はお安く＆便利な“真っ赤な”ママチャリ型をお借りした。

「観光案内所」では、沈下橋はじめ四万十川アクセスポイントを記したマップなど散策&ポタリングに便利なグッズが手に入る。

マップを見つつママチャリレンタサイクルで赤鉄橋（四万十川）を目指す。

上流で雨が降ったせいか赤鉄橋からみる四万十川は深緑の悠々とした流れに覆われていた。

しばし自転車を止める。十重二十重の峰々、霧と靄がたたずむ川の上流を眺めながら、四万十川の堤でビールを開ける。おにぎりセットのから揚げを包張りながら、朝から乾杯！おにぎりもうまい。（我ながら飲んでばっかり！）
到着予定時間を大幅に過ぎながらも、時に自転車を降りながらゆっくりと「トンボ王国」に向かう。

四万十川を渡り、対岸の住宅地へ。時折、スコールみたいな雨にあいながらも、トンボ公園に到着。

休耕田とそこに流れ込む小さな河川からなるフィールドを有する公園である。その入り口は以外にも住宅地の近所で、特別な保護区といった感じは全くない。

9 時 30 分、トンボ公園到着。途中、色々寄り道したので時間が余計にかかったが、中村駅（観光案内所）から直接では約 15 分というところであろうか。

入り口とその横には大きな駐車場がある、車でも来訪できる。トンボ公園こと「トンボ王国」は正式名、「四万十市トンボ自然公園」といい、トンボ研究者である杉村光俊氏がトンボの保護と生息地の確保を目的に「絶対に奪われないトンボ保護区」を目指して、全国から個人や団体からの協力を受けながら 1985 年から本格的な施設と保護区の整備が始められたおそらく世界発のトンボ保護公園である（詳しくは http://www.gakuyukan.com/を参照して

ほしい）。自転車を止めて早速入園する。保護区自体への入園は無料であるが、公園には、「あきついお」と呼ばれる学習館を中心に、日本と世界の多くのトンボ標本と生態を説明したコーナーなどからなる「トンボ館」、四万十川水系の魚類を中心に本格的水族館形式の展示室からなる「さかな館」から構成されている立派な体験型学習施設（自然史博物館）となっている。大人が見ても十分納得の

いく内容で決して手抜きはしていない見ごたえのある展示内容である。入館には、大人 840 円、中高生 420 円（小学生以下 310 円）が必要であるが、観光案内所で配布しているパンフやクーポンを使えば割引料金となるので利用したい特典である。ちなみに「さかな館」、国産淡水・汽水域に生息する魚の単一館での飼育・展示数は日本一である。

実は、著者、今回 2 度目の訪問である。今回は次の列車の時間もあり、館内までは取材しなかったので写真はありませんが（もし撮影の際は職員の方に許可をいただいてください。また、撮影（フラッシュ）不可の場所もあったと思いますのでルールに沿った観察をお願いします)、数多くのトンボの標本や本公園での四季のトンボの生態についての展示は飽きることがない。世界のトンボ標本数、約 1000 種 3000 点は、単一施設の常設展示として世界一で、約 200 種の日本産種ほぼ全種の標本を展示しているとのことである（http://www.gakuyukan.com/doc/tombo-tombokan.html を参照)。また、魅力は「トンボ館」だけではなく、「さかな館」のアカメは圧巻である。アカメは現在その生息が危ぶまれ

るスズギ目に分類される大型の肉食魚であり、体長は優に 1m を超すものも多い。成魚の魚体は銀色に輝き、その名の通り、その目が鈍く赤色に光る巨大な精密機械のような容貌である。現在、高知、宮崎など西日本の太平洋側沿岸にある大型河川の河口や汽水域に生息が確認されているが、絶滅危惧種であり今後の保護が望まれている日本固有の魚である。「秋津・鱸のくに」古事記だったか日本書紀だったか忘れてしまったが、まさに日本そのものを代表する生き物の展示館である。さて、この２館は展示資料の他にもビオトープや体験学習コーナーを設けており、フィールド学習の格好の場ともなる機能を持っている。また、「トンボ王国体験メニュー」として保護区内の池でのザリガニ釣りや生き物さがしゲームなどの体験型学習メニューが用意されている。

さて、いよいよ園内（保護区）に目を（足も）向ければ、休耕田に流れ込む小河川とともに大小様々な池、流れ込み、草木の追われている休耕農地、森林などからなる本格的な自然保護区である。全部見て回るにはかなり時間がかりそうだ。また、本格的な保護区でもあるため、過度な手入れは

なく人工物は必要最小限に留められている。
沼沢地の維持のため、必要に応じて、草刈りや浚渫が行われている。当日も（おそらく）ボランティアによる繁茂する夏草の除草が行われていた。
園内には数多くのトンボはもちろんのこと、蝶、魚類、草木、花々などなど様々な生き物で満ち溢れていた。ちょっとした散策には持ってこいである。

足元が少しぬかるんでいるのが玉の傷であるが、「トンボ公園」しかもナショナルトラストによる自然保護区である。その点くらいは我慢したい。

この保護区は、四万十市」と社団法人「トンボと自然を考える会」による土地購入と借用、一部はWWF ジャパンによる購入地（1985 年 6 月に購入した土地がトンボ王国の始まりである。

下記写真）などによって構成されており、現在でもナショナルトラスト活動による保護区の拡大、維持、管理がなされている。

かくゆう私も「トンボと自然を考える会」会員であり、ほんの少しではるがここの保護に関与させていただいております。

トンボ（虫）好き、環境に興味・関心のある方々には損はさせないと

思いますので会員ならずとも、一度是非来訪してほしい地であります。（トンボが飛ぶのが速くて写真はありませんが）当日も多くのチョウトンボが群れ飛んでおりまして、どこに行ってもトンボがいない場所が見当たらないくらいでした。

館内、フィールドともたくさんの生き物に出会える場所で、都会部にある小中学生の修学

旅行、ちょっと遠出での遠足、環境学習（林間学校とか）に活用してほしい場所である（実際、地域学校の遠足や環境学習にはたくさん使われているようである）。

園内には昆虫の他にも花々も多く咲き乱れていた。

ゴリ？カジカ？

園内の池には魚もたくさんおりました。また、外来種駆除を兼ねたザリガニ池もあります。

もちろん本命トンボもたくさん飛んでおりました。写真撮影が下手な著者には大人しくとまっているトンボの撮影が精一杯。

大型のトンボでは、ウチワヤンマ、コヤマトンボ、オニヤンマ、ギンヤンマなどを確認できました。

あと、小型では、数え切れないくらいたくさんのイトトンボを発見できました。

滞在約 1 時間 20 分。これまたせわしない訪問で、駆け足でした。

さて、そろそろ時間が迫ってきました。名残惜しくも、再訪を誓い、公園を後にします。

天気が急変する日で、一雨きそうな空模様となってきました。

至るところに案内看板があり、自転車、自動車で迷わず来れると思います。

とにかくこぎまくって観光案内所まで自転車を走らせます。

観光案内所で自転車を返して、猛ダッシュで中村駅へ。

途中ひと雨浴びますが、できれば中村駅 11 時 11 分発「あしずり 6 号」に乗車するため、無視して走り続けます。
赤鉄橋（四万十川）のたもとでは花火大会？のイベント準備に余念がないようだ。今度は、中村で一泊しようと思う。

なんとか「あしずり」に間に合った。

この後、車内でビールを頂きながら、高知、なぜか高松を経て、ぐるっと大回りして反対側の松山まで向い、

その途中。

前日、立ち寄って取材した伊予西条駅で

（四国山）石鎚山に綺麗な虹を見ることができた。

地域活性化と鉄道の関係、まだまだ可能性がありそうです。
芸備線に充分活かせそうだと思う。
そんな希望を感じることができた逃避行取材でした。

「グリーン車でらくらく乗り鉄（自主）鉄道取材」　完